

MELDIA

FREE

VOL.65

JAN.2025

都議会
議員

龍円あいらり

誰もが自分らしく輝きながら参加する
インクルーシブ社会を目指して

“世界を奏でる
ピアニストになりたい”
夢に向かって自身と闘うピアニスト
紀平 凱成さん

インクルーシブ教育システムの
先にある共生社会を作りたい
子どもたち一人ひとりに
対応する柔軟な学校を目指して

パリコレ出演を叶えたダウン症モデル
夢を持って、口に出せば
誰かの耳に届いて縁に繋がる
菜桜

シンママまると
息子の成長記録 VOL.2

30名様にプレゼント

キーワード★クイズ★プレゼント

New Year Quiz PRESENT

キーワードを集めて応募しよう! 詳しくは最終ページへ!



誰もが自分らしく 輝きながら参加する インクルーシブ社会を 目指して

東京都議会議員として、インクルーシブを切り口とした政策を働きかけている龍円あいりさん。
過去には渋谷の『インクルーシブアート』という200mに渡る壁に、大人も子どもも、障がいがある人もない人も含め250人以上がともにアートを制作するプロジェクトも発案した彼女に、議員となった背景や、これからの政策について伺いました。

都議会議員 龍円あいり MELDIA

東京都議会議員。ダウン症のある息子を持つ。日本初のインクルーシブ公園を整備するなどインクルーシブな社会を目指す政策に力を入れている。

龍円さんにはダウン症のある息子・ニコ君がいます。「初めての出産は2013年のときにアメリカのカリフォルニア州で、生まれた子どもにはダウン症があり、なおかつ事実婚というマイノリティの要素ばかりでした。しかし、マイノリティであっても困ることはなく、福祉と教育が充実していたこともあり、むしろ子育てを楽しんでいました。

その後、シングルマザーになって2015年に日本に帰ってきたら、障がいのある子どもがいてシングルという状態がとても大変で、同じく障がい児を育てているご両親たちに話を聞くと、みんな困っていることに気がつきました。そして、「アメリカの療育情報をシェアします」とコミュニティを作ったら、発信してから1時間以内に枠が埋まり、かつ日本各地から赤ちゃんと飛行機に乗って私の話を聞きに来るといって状態に大変驚きました。皆さんが涙ながらに『こういう出会いが欲しかった』『不安がなくなりました』『地元に戻ると1人で』とおっしゃっていて、これはおかしいな。アメリカではなぜあんなに充実している、日本ではなぜこうなんだと、色々調べたところ、IDEAという障がい児の0歳から21歳までの教育に関する法律

実体験をもとに、障がい児の子育ての現状を変えたいと政治の道に

CONTENTS

vol.65

MELDIA 2025 JAN.

- 03 **誰もが自分らしく輝きながら参加するインクルーシブ社会を目指して**
- 06 寄贈レポート より豊かな社会生活に向けてメルディア賞 メダル・カタログギフトを寄贈
- 10 “世界を奏でるピアニストになりたい” 夢に向かって自身と闘うピアニスト
- 12 バリコレ出演を叶えたダウン症モデル 夢を持って、口に出せば誰かの耳に届いて縁に繋がる
- 14 マーノで働くリーダー・スタッフを直撃 マルエツではソーマライゼーション社会の実現、をめざしています!!
- 16 知的障がい者スポーツ(IDスポーツ)のおかげで、世界が開けた!!
- 18 インクルーシブ教育システムの先にある共生社会を作りたい 子どもたち一人ひとりに対応する柔軟な学校を目指して
- 20 **おさんぽ DE 楽しむ!** 「何度でも帰ってきたい旅館を」体も心も健康な温泉旅館を目指して
- 22 シンママまると息子の成長記録 VOL.2
- 24 美幸先生とたのしむ ミラクル絵本ツアー VOL.11
- 26 時に、尊いものとは何かと自分の心の中を見直す気持ちを持つこと 水越けい M Size はじまり Again
- 28 シングルマザーの方も安定して働き、子どもと触れ合える時間を作ってほしい
- 30 読者の皆様への感謝を込めて30名様に豪華賞品プレゼント! **New Year Quiz PRESENT**



vol.65 MELDIA 2025 JAN.

発行元/一般財団法人メルディア
広報誌MELDIA Vol.65/2025年1月25日発行
本誌の無断転載・複製を禁じます。
2017-2025©All Rights Reserved.
一般財団法人メルディア/広報誌MELDIA



※QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です。



次号予告
MELDIA vol.66
2025年3月25日 発行予定



一般財団法人メルディア
〒169-0072 東京都新宿区大久保2-5-22
セキサクビル7F
一般財団法人メルディア
TEL:03-6302-1871



開いた政治塾だそう。「小池都知事からは『そんなにやりたいことがあるなら自分でやったらどう?』と声をかけていただきました。」

障がい児を育てるシングルマザーで務まるのかという不安もありましたが、悩んだ末にチャレンジすることを決め、2017年都議会議員になりました。父が政治学者ということもあり、小さい頃から政治や行政の力が社会を変えていく話は聞いていたので、そこにかけてみようという思いもありました」と龍円さんは言います。

があり、全米どこにいても同じサポートが得られることが分かりました。日本にも同様の法律を作りたいと行政に働きかけを始めました。」

都議会議員になったきっかけは、お母様の勧めで入った小池百合子都知事が

地元で暮らし続けられる、家や機能のある都営住宅を作りたい

海外に住んでいた経験を生かし、生まれのスイーデンの社会福祉や、アメリカの教育を照らし合わせながら提案型

の政策を進めている龍円さん。「実現したものの1つは、日本で初のインクルーシブ公園の整備です。他にも、スイーデンのユースクリニック制度を参考に、東京都でもユースヘルスケア事業を立ち上げました。子供・若者が無料で公的な医療相談を受けられる制度で、親や学校に知られることなく、思春期ならではの困り事を相談でき、必要に応じて医療機関への同行支援まで行います。困っている子供が危ない橋を渡らなくても困り事を解決でき、正しい知識と正しい支援が得られます。そういったスイーデンやアメリカの政策事例を参考にしながらも、自分自身が障がい児の



前号に登場したニボ、実は龍円さんもプロジェクトに携わっていました。ニボのイラストがかわいい専門書の新刊ができました。

親であるという当事者の視点を合わせて、インクルーシブな日本の社会を目指した政策を進めています」と話します。これからはどのような政策を構想しているのでしょうか。

「地元の渋谷区でいうと『住み続けられる』をテーマに都営住宅に福祉機能をプラスした運営を実現させたいと思っています。都心部は今、高齢者と障がい者が住み続けられない現状があります。高齢者の方は、十分な介護施設が自分の街にはなく、障がいのある方は、親亡き後はサポートが足りず、住み続けられず、全く所縁のない地域へ出て行かなければなりません。自分が愛している地元の

出て行かざるを得ない現状を変えようと、住み続けられる渋谷、東京というような政策を進めたいです。渋谷では、27棟建て替えが決まっている場所があるので、昔の都営住宅の機能から次の機能を備えた都営住宅への転換を実現できるように動いています。」

分離教育から、多様な子が共に学べる学校に

インクルーシブ教育を進めるため、特別支援学校と都立学校、区立小中学校等

の一体的整備を行うという話もあるそうです。

「2022年に国連から分離教育をやめるようにと日本政府に勧告がありました。しかし日本では特別支援学校に通う子が増え続け、障がい児と健常児の分離教育が進んでいます。この分離するベクトルを、多様なお子さんが共に学ぶインクルーシブな方向に変えたいと長年取り組んでいます。今年度からは、東京では特別支援学校判定のお子さんが地域の学校に就学すると『インクルーシブ教育支援員』を配置できるようにしました。また特別支援学校と都立学校や区

市町村の小中学校を、同じ建物内に併設する一体型の整備

について検討が始まりました。特別支援学校の

高度な専門性を、地域の学校に兼ね備えていくことで、インクルーシブ教育を進めたいと考え

ています。

また、今年

新たに提案を

しているのが、『特別支援大学』の創設です。日本では、高校卒業



後も大学や短大などの教育機関に通う人は8割にのぼっています。しかし知的障がいがある人にとっては、高校卒業後の教育がほぼ存在していません。息子のニコを見ても感じますが、障がい児は成長がともゆっくりなんです。それなのに18歳になったら社会に出なくてはならないのは、常に疑問に感じていました。生徒の数も減る中で、普通の大学に都立特別支援大学を併設させて、インクルーシブな環境で学び続けられるような教育改革を進めたいと考えています。多様な子が学べる場を増やす、次のミッションをそこに据えて取り組んでいます。



渋谷 みんながつながる インクルーシブアート
〒150-0011 東京都渋谷区東2丁目25-36
https://youtu.be/8Fw_T_B2pww?si=pGzHqD-3FxN6IQoN

す」と、これからのより良い社会への構想を話してくださいました。

MELDIA 寄贈レポート

より豊かな社会生活に向けて メルディア賞 メダル・カタログギフトを寄贈

一般財団法人メルディア 代表理事 小池 信三

知的障がい者の選手たちが170名以上参加する全国大会「パラID全日本卓球選手権大会2024」で、フレンドリートーナメント優勝者、決勝トーナメント優勝者へメルディアからメダルやカタログギフトを寄贈しました。選手たちの真剣な眼差しからは、連盟が「卓球を通じて培ってほしい」と語る想い、そのものを強く感じられました。



寄贈レポート

一般財団法人メルディア 代表理事 小池 信三

卓球を通じて競い楽しむ、選手たちの表情が印象的な大会

知的障がいの方は特に、学校卒業後の余暇活動が少なく、生活面での楽しみを見つけていくという声も多くあります。スポーツが余暇の一つとしてもっともっと浸透していき、気軽にそして長く楽しめるものとなっていくことで多くの方の人生の豊かさに寄与するのではと考えています。今回のパラID全日本卓球選手権大会では、楽しみながら取り組む方からナンバードワンを目指す方まで多くの方が卓球という競技を通じて、交流し、競い、楽しんでる姿が印象的でした。選手たちのひたむきな姿勢、応援のみなさまの熱量、運営のみなさまの尽力でとても良い大会でした。

今後も一般財団法人メルディアはみなさまの豊かな生活に寄与できるよう様々な団体と連携し、協力していきます。



スポーツを通じた感動と成長を目指す

一般社団法人日本知的障がい者卓球連盟は、スポーツの魅力を通じて感動や喜びを分かち合い、身体的・精神的成長を促進することを目指しています。

1998年に全国大会を初開催し、パリ2024パラリンピックでついに障がい者卓球初の金メダルを獲得しました。また、選手育成の指針として、日本スポーツ振興センター(JSC)の指導のもと「アスリート育成パスウェイ」を策定し、子どものスポーツ体験からトップアスリートになるまでの過程を支援し

ています。単なるメダリストの輩出だけではなく、誰もが憧れて応援したくなるような「魅力あるアスリート」を輩出することを目標に、現在、強化指定選手24名が活躍しており、パラリンピック出場を目指す選手の育成をしています。

大会参加選手は170名超。白熱する戦いと新たな可能性

大会の注目ポイントを事務局の二人に伺いました。

「今回の大会は、2025年度の強化指定選手選考に関わる重要な試合です。また、ダウン症の部で初めて男子選手が参加し、新たな可能性が広がりました。特に、6月開催の『パラIDジャパン・チャンピオンシップ卓球大会2024』と今回の大会結果が選手たちの将来に大きく影響するため、緊張感あふれる戦いが繰り広げられています。特に女子選手は毎度順位が入れ替わるほど実力が拮抗しており、さらなる成長が楽しみです。」



事務局長 野村春衣さん

2008年任意団体時に事務局の手伝いとして関わり、2009年~2013年までボランティアにて事務を行っていた。2019年に現副会長の金沢さんからの声かけて、再び事務局で仕事をすることになり、2024年より事務局長に就任。

副会長兼理事長 石川一則さん

2013年に国際大会に帯同コーチとして参加した事がキッカケで、翌年知人から推薦され、理事および強化スタッフとして手伝いを開始。以降2021年まで理事および強化スタッフを継続し、2022年より理事長に就任し現在に至る。

障がい者卓球を通じた希望と感動の広がりを目指して

現在連盟では、卓球競技の国内普及と認知度の拡大を目指し、選手派遣費用の支援強化を進めています。

「国際大会派遣時の渡航費は『個人負担』となっております。安定したパフォーマンスを発揮するために不可欠なパーソナルコーチの分も含めてです。この現状を改善するためにクラウドファンディングに挑戦しています。卓球は、年齢や体



格を問わず誰でも楽しめるスポーツであり、健康増進や機能回復効果も期待されています。パラリンピックでの金メダル獲得は、多くの人に勇気と希望を与えました。この機会に卓球の魅力に触れてみていただきたいです。

一般社団法人日本知的障がい者卓球連盟主催

世界の舞台で活躍できる選手を輩出するために選手の海外遠征費支援を目的とした初のクラウドファンディングを実施中!

知的障がいのある方々と世界をつなぐためのご支援をお願いいたします。

QR code and URL: <https://ubgoe.com/projects/843>

参加選手にインタビュー!

田村 歩夢選手
(三重県・若草ジュニア所属)

田村選手は小学6年生の冬に卓球を始め、現在高校1年で卓球歴4年目だそう。今日の大会に向けては「カットマン」という戦型を重点的に強化してきました。「苦手だからこそ、低いボールで打たれないように送る練習を主にしてきました」。得意なプレーは「サーブからの3球目攻撃」で、ドライブを活かした攻撃のスタイルが持ち味。今大会ではベスト16を目標に、まずは予選1位通過を達成。将来はナショナルチーム入りを目指し、国際大会での活躍を夢見ています。お母様も「夢を実現してほしい」とエールを送っています。



馬渡 伊吹選手
(青森・八戸卓球アカデミー所属)

馬渡選手は小学校低学年から卓球を始め、競技歴12年以上の実力派です。大会準備では10種類ものサーブを習得し、得意の「サーブからの3球目攻撃」で勝利を狙います。今大会の目標を聞くと「優勝です」と沼田コーチは即答。そして、目指すはロサンゼルスパラリンピックでの金メダルと言います。沼田コーチは「普段、地元では同じカテゴリーの仲間が少ないので、全国から多くの人が集まるこの機会に、友達づくりや交流をして人としても成長してほしいです」と語ります。馬渡選手自身も「自分に集中して頑張りたい」と意気込み、着実に努力を重ねています。



善當 竜也選手
(東京・TOMAX所属)

善當選手は聾学校でのクラブ活動をきっかけに8歳頃から卓球を始め、10年近くプレーしています。得意なプレーは「カット」と「ロビング」。目標は今大会での優勝です。2024年6月から大会に出始め、週に1回のTOMAX所属コーチのレッスンや、サークル団体等での練習を増やしているそう。今後は「試合でメダル200個」を掲げ、卓球を通じたコミュニケーションを楽しみながら挑戦を続けています。お母様も「卓球を通じて日々の生活が豊かになることを願っています」と見守っています。



いつから卓球を始めたのか?
得意なプレーは?今後の目標は?
選手とコーチ、ご家族に
直接話を伺いました。

川久保 美鈴選手
(長崎・ポルト長崎所属)

川久保選手は中学生から卓球を始め、競技歴20年を誇るベテランです。お兄さんとの練習が日常的で、得意技は「スマッシュ」と「バック」など。前回の優勝に続き、今回も優勝を目指しています。普段は介護施設で働きながら、週1回のクラブ練習や自宅での練習をこなし、九州地方での大会に参加しています。今後の目標はサーブやリタンの精度を高めることだそう。お父様も「メリハリのある生活をしてほしいので、卓球や趣味を通じて色々な人との交流や友達作りを楽しんでほしい」と期待を寄せています。



大接戦の末、決勝トーナメント優勝を勝ち取った皆さん



パラID全日本卓球選手権大会2024
男子シングルス 優勝

竹守 彪選手(千葉・TOMAX所属)

「パラリンピック明けて試合感がなく、今までで一番苦しい試合でした。無心でやるしかない、自分のプレーを貫くことだけを考えました。この優勝はロサンゼルスに向けての一歩に繋がっていると思うのでとても嬉しいです。自分ももう31歳ですし、未来の子どもたちに世界で活躍できる選手になってもらえるよう、引っ張っていきたいです」(竹守選手)
「本人も言っているように、気持ちも少し途切れていた中での調整でもしかしたら間に合わないかなと思ったのですが、試合をやりながら徐々に調子を戻らせていたと感じました。それでもきちんと勝ちを取れたので本当によかったです」(コーチ)



パラID全日本卓球選手権大会2024
女子シングルス 優勝

山口 美也選手
(滋賀・絆サンセリテ滋賀所属)

「今も心臓がバクバクしてすごく嬉しいです。優勝を目標にしていたので、今まで頑張ってきた成果が出たかなど。今後はロサンゼルスパラリンピックに出場することを目標として頑張ります」(山口選手)
「競技を離れていた時期もありましたが、優勝をもう1回取りに行こうということを目指してきました。最後まで諦めず我慢強く粘る彼女の持ち味が出ていました。普段の練習では外部の方にもたくさんお世話になり、そのおかげで適応能力が増して、色々なボールへの対応力が繋がったと思います」(コーチ)

栄えあるメルディア賞受賞者の皆さん



パラID全日本卓球選手権大会2024
男子シングルス
フレンドリトーナメント 優勝
高橋 雄大選手
(東京・ITS三鷹所属)



パラID全日本卓球選手権大会2024
女子シングルス
フレンドリトーナメント 優勝
熊田 めぐみ選手
(福島・T.C 赤井沢所属)

メルディア賞として
優勝者の皆さんに
メダルを贈呈

今回、フレンドリトーナメントの優勝者にメルディア賞として大会名を刻印したメダルを、男子シングルス・女子シングルス決勝トーナメント優勝者には副賞としてカタログギフトを贈呈しました。



一般社団法人日本知的障がい者卓球連盟

知的障がい者卓球を更にアスリートスポーツとして発展させ、知的障がいのある子どもたちの目標となる人材育成をおこなうことをミッションに選手の支援をしている。
<https://jttf-fid.org/index.html>



“世界を奏でるピアニストになりたい” 夢に向かって自身と闘うピアニスト

高校生でピアニストとしてデビューし、注目を集める紀平 凱成さん(23歳)。視覚過敏や聴覚過敏と闘いながら、「人を笑顔にしたい」とたくさんの音楽を奏でています。今回はご本人とご両親に話を伺いました。

ピアニストの片鱗は 幼い頃からの即興演奏力に

両親の影響から幼い頃より楽器や音楽に囲まれて育ち、2歳から鍵盤で遊び始めたという凱成さん。「5歳の頃にはもう好きだったね」と自身を振り返ります。7歳の頃にはピアニストになりたいと宣言をしていたと言います。作曲家・カブースチンを始めとしたクラシックの他、ロックやポップス、ジャズなどジャンルを問わず音楽が好きだそうです。「家にある70、80年代のCDをよく聞いていて、それを凱成が鍵盤で再現していたんです。周りに鳴っている音を弾き始めたのはそこからです」とお父様は話します。

絶対音感を持ち、その場ですぐに耳で音程を取れるという凱成さんは、即興演奏も大得意。取材中も、その時感じたものを音楽にして弾いてくれました。「音楽だけでなく、ノイズや生活音も全て音で聞こえているようです。作曲をするときも、五線譜を使っても、鍵盤も触らず一心不乱に書き続けるんです。メロディーから思いつくとかではなく、彼の頭には音楽が出来上がった状態で降りてくるようです。凱成には人と違う音感があるなと思っていました。彼がピアニストになりたいと言いだしたので、それならやり通せるようにサポートをしようと思いました」と語ります。

過敏を自分で克服する、 意思を持って夢を叶える

情景や人の心境をそのまま作曲することが得意な凱成さんですが、ピアニストとして活動する転機は何だったのでしょうか。「高校生の頃、視覚過敏や聴覚過敏が強く、人の顔を見ることもできなくて、学校に行くときもずっと目を瞑ったままでした。しかし、ピアニストになりたいというところで、凱成の演奏動画をYouTubeに上げていたところ、ご縁があり人前で演奏させていただくことになり、それがデビューとなりました。そこから凱成の意識も変わり、この



世界のような場所に行って、 現地で感じるものを音にしたい

将来の目標を聞くと、「世界を奏でるピアニストになりたい。今年にはCDをもっと作るために頑張りたいです」と凱成さん。「世界を奏でるといえるのは、世界のような音楽や文化、食べ物、建築物などを現地に行き触れて感じたことを音にしていくということのようです。また、自分の音楽を世界の大勢の人に聞いてほしい」とお父様。「聞いてくださる方がみんな笑顔になってくれるのが嬉しいようです。言葉が遅かった分、音楽でコミュニケーションを取っているんです」とお母様。プロとしての自覚を持って日々の練習も欠かさないと凱成さんは朝起きるとまず2時間ほどピアノを弾くそう。「1日弾いているときもありますが、外に出て様々なことをインプットすることも作曲には必要なのでそれも大事にしています。基本的に好奇心旺盛ですね」とお父様。昨年11月にはアルバム「HORRAY!」をリリースしました。凱成さんが特に聞いてほしい曲は、「TOKYO」『愛の夢』だそうです。

他者を思いやれるゆとりを 持つような世界になってほしい

お父様は、凱成さんについて「宝物で



状態では人前でコンサートができないと、自分で克服するための努力を始めました。自分の曲を人に聞いてもらいたいという想いでピアノをやってきたので、それを1回達成できたことでモチベーションになったのだと思います」とお母様。「電車やツアー会場には凱成にとつて気になる音があるので、自ら事前に調べてYouTubeを見て予習して。それでも最初は耳を塞いでいるのですが、だんだん慣らしていった。今は過敏の部分で心配することはなくなりました」というお父様に続き、「きっかけはそこ、7月15日で17歳の時だね。でも、中学3年生の時、11月23日のその時(のコンサート)はイヤホンしてた」と凱成さん。

あり、尊敬しています。素直で打算がなく、人をよく見て元気をくれる存在です。夢に向かって邁進する姿には感心しますが、将来一人になったときのことを考えると、理解者やサポートが必要だという不安もあります。社会がもっと寛容になれば、そうした環境も作れるのではないかと思います。

お母様は「大切な存在であることはもちろん、私たちがしたことをそのまま映し返す鏡のような存在です。たくさん吸収してくれて嬉しい場面もある反面、親



としていつもどう育てていくべきか責任感も常を感じています。同じように障がいのある子を育てる親御さんを見ると辛い部分を目の当たりにすることもあり、他人事ではないと感じます。障がいの有無にかかわらず、みんながもう少し余裕を持てる社会になればいいなど。今の社会では自分のことで精一杯な人が多いと感じます」と話します。「余裕があれば、他者を助けたいとか、福祉面でも前向きな変化が起こるんじゃないかなど。障がいがあっても光る部分は必ずあり、それに気づくことでお互いに学び合い、支え合う社会を目指せると思います」という言葉を頂きました。

紀平 凱成さん

2001年生まれ。3歳の時に自閉症スペクトラム症と診断される。幼児期より風の音や鳥の声などを音符で表現し、楽器で遊ぶ内に音楽理論を自然と習得。鍵盤に触れずに白紙に一気に音符を並べる独特のスタイルで数千の曲を書きためる。作品集「HOORAY!」が発売中。

<https://khirakyle.com/>

<https://eplusmusic.jp/release-27>

【紀平凱成ピアノコンサートツアー2024-2025】全国で開催中!

【秋田】2/1(土) エリアなかいち・にぎわい交流館AU3F 多目的ホール

【宮城】2/2(日) 日立システムズホール仙台 コンサートホール

【東京】2/8(土) 浜離宮朝日ホール

【兵庫】2/22(土) 神戸朝日ホール

【北海道】3/20(木・祝) 札幌コンサートホールKitara 大ホール

<スペシャルゲスト:ソプラニスタ 岡本知高さん>

<https://eplus.jp/kyle/>





パリコレ出演を叶えたダウン症モデル 夢を持って、口に出せば 誰かの耳に届いて縁に繋がる

2024年3月にダウン症モデルとして日本人初のパリコレデビューを果たした菜桜さん。
パリコレ出演の感想や20歳を迎えたこれからの想いについて
お母様・齊藤由美さんに話を伺いました。



PARIS COLLECTION



「とにかく楽しむ」笑顔で
乗り切った大舞台

パリコレの大舞台ではデザイナーのサ
ミナー・ムガールさんのSMG Global
Catwalkのワンステージを丸々担
当。特注の着物ドレスで堂々とランウェイ
を歩く姿はさすがです。

「衣装が着物のドレスということでも普段の
服と歩き方やポーキングが変わるため、
近い形の着物を買ってウォーキングの
レッスンを受けたら、自宅でも何度も練
習して臨みました」と齊藤さん。大舞台上に
緊張したのかを聞くと「菜桜はランウェイ
に出るときは意外と平気そうに見えまし
た。『行ってきまーす！』という感じで。私
の方がドキドキしました。ただ、普段の
ファッションショーとは雰囲気も違うの
で、ランウェイの前は表情がいつもと違
いましたね。練習中は背筋をちゃんとしよ
う、ああしよう、こうしようというさく
言っていました。当日にもそれを言っ
てしまおうと本人もさらに緊張してしま
うので、出番前は『ランウェイを楽しんでお



「とだけ伝えました」。その言葉に「うん」と笑顔で頷き、ランウェイへ向かったという菜桜さん。登場曲のアメリカン・グレイト・アイズが会場に流れるとともに舞台上で、行った姿に終始涙が溢れましたと齊藤さんは語ります。

**初めての海外での経験は
驚きの連続**

日本のショーとの違いについて聞くと「日本ではランウェイの前に観客の方が多いのですが、パリコレはランウェイの両側に椅子が並んでいて、そこをまっすぐ歩くというスタイルです。事前に日本でパリコレのスタイルのショーに出させていただいたので、イメージが出来ていたのは一つ安心材料でした」。

今回のパリコレ出演の機会に初めて飛行機に乗ったという菜桜さんですが、お母様とともに2時間だけ観光を楽しんだそう。「食事はほとんどファーストフードで済ませていましたが、一度食



べたエスカルゴが本場において感動しました。飛行機は離陸時と着陸時は2人で少しドキドキしていましたね。私も海外に行くのは30年ぶりくらいでしたので初めて近く、フライトのチケットを取るのにも一苦労でした。ショーが終わってすぐ帰るといふスケジュールで忙しうはありましたが、本当に貴重な経験でした」と齊藤さん。

**20歳という節目を迎え、
自覚する大人という自分**

普段はファッションショーへの出演や、SNSで服やコスメのPR活動を行っている菜桜さんですが、最近福岡でパリコレの衣装を着て講演会に登壇するなど、日本各地へと活動の幅が広がってきているそう。これからの目標を聞くと「ニューヨークに行きたい」と菜桜さんは即答します。

「ニューヨークがどこにあるか本人は分かっていますが、テレビや映像、周りから入ってくる情報を聞いて、興味を持っているようです。他には、東京ガールズコレクションに出たい、嵐の櫻井翔さん、モデルの藤田ニコルさんに会いたいと言っています。夢は口に出して言うようにしているんです。今日まで本当に良い流れで、デザイナーの雅さんに出会って、パリコレに出てテレビ番組に出演して、と目まぐるしく進んできました」と振り返ります。「声を掛けていただかないと仕事は来ないので、ただ待つだけではなくて今はSNS発信にも力を入れていきます。昨年20歳を迎え、菜桜本人も『大人の仲間入りをした』という自覚も出てきたようなので、その気持ちも尊重しながら活動していきたいなと思います」。

**夢を持ち口に出せば、
夢は叶えられる**

「自分たちに言い聞かせていることですが、皆さんにも夢を持ってほしい。障がいのある人も夢を持つには関係なく自由なので、どんな人にも小さな夢でもいいので持つてほしいと思っています。夢を持つと、それが叶うまでの時間がとても楽しいです。私たちも様々なことがありますが、一つの夢を叶えるまでの時間は宝物でした。菜桜が海外のファッションショーに出たいと言っているのを聞いて

菜桜
2004年3月静岡県生まれ。「障がいがあっても夢をあきらめない」「みんなが笑顔になれるモデルになりたい」と活動中。「パリコレクション」「東京ガールズコレクションティーン(TGC teen)」「24時間テレビ」に出演するほか「VOGUE JAPAN」の誌面も飾っている。
Instagram: https://www.instagram.com/nao_angel_smile/
YouTube: <https://www.youtube.com/channel/UCiHCTnw0h6FUP9E88JGdEUw>
ブログ: <https://ameblo.jp/nao-angel-smile/>




“ノーマライゼーション社会の実現” をめざしています!!

マルエツでは

マーンで働くリーダー・スタッフを直撃



マルエツ 金町店

食品スーパー(株)マルエツの特例子会社として、1992年に設立した(株)マーンでは、190名近くの障がい者が働いています。マーンで働くとはどういうことか?マルエツの店舗でいきいきと働く方々とうかがいました。



仕事を始めてから、色々なことに
気付けるようになった

首都圏を中心に300店舗以上の食品スーパーを展開するマルエツの特例子会社マーンの朝は、朝礼から始まり、ラジオ体操、身だしなみチェック、リーダーからの連絡……。全員が業務に支障が出ないよう、一つひとつ丁寧に確認していきます。

「入社してから、色々なことに気付けるようになりましたね。そう話すのは、2017年入社の方の八木さん。

「友達からも勤が鋭くなった、と言われる。あとは商品の場所の案内とか、分からないことはちゃんとリーダーに引き継いだり。それらの点が、入社してからの一番の変化かな、と思います」。

売上が多いときは、
やっぱりうれしい!

「買い物に行ったとき、他店と自分が働いているお店の違いなどをよく観察しますね。値段とか品揃えとか。マーンは優しい人ばかりなので、コミュニケーションが増えた分、気持ちに余裕ができました」。

そう話すのは、同じチームで働く阿部さんです。阿部さんは数字に強く、マルエツのウェブサイトに掲載されている売上情報もチェックしています。



2017年入社の八木さん

「売上がいいとうれしいですね。マルエツでは、毎月1日の『一の市』をはじめ、売り出しの日は、たくさんのお客様が来られてレジも混雑します。私たちも無理が生じない場所で前陳(商品を手前に出すこと)や商品補充をするなど工夫しています」。

企業就労でミスマッチを
避けるには

リーダーの追川さんに仕事をやる際、気をつけていることについてうかがいました。

「指示を出すときは、短い文章で具体的に示すよう気をつけています。『なるべく早く』とは言わずに、時計を見せながらあと10分で終わらせようね、といった具合に」。

ノーマライゼーション推進部の吉野さんは

「マーンでは、保護者の皆さま・会社・支援機関と連携しているのが特徴です。会社は本人が安心して働けるよう合理的配慮をしますが、会社だけですべてを解



八木さんと同じチームの阿部さん

最後にこれからマーンで働くことを検討している方々に向けて、メッセージをお伝えしました。

働くことは怖くない!
ぜひ応募してみてください

決できるわけではありません。支援機関と定期的に面談することで、より就労しやすい状況へと導いていきます。会社には言いづらいことも、支援機関になら言えるかもしれません。

また保護者の方との情報共有を大切にしています。保護者の方の中には、障がい特性を明らかにしてしまうと、就職できなくなるのではないかと心配される方もいらっしゃると思います。しかし、障がい特性を隠して就職しても、入社後、会社の業務内容と障がい特性が合わず本人が苦しい思いをすることがあります。

もちろん、働いていく中で上手く適応できる人もいますが、それができないと結局離職してしまいます。そうならないためにも、ありのままの状態を教えるほいすです」と話してくれました。

「私はみんなで一緒に仕事をすることを楽しんでいます」と話すのは八木さん。



ノーマライゼーション推進部の吉野さん(左)とリーダーの追川さん

「時には失敗して落ち込むこともありますが、その際も周りの方がサポートしてくれれます。準備室で少しゆっくりしていいよ、と心のケアをしてくださったり。分からないことがあったら、すぐ周りに聞いたほうがいいです。あとは挨拶はしっかりしたほうがいいと思ひすね」。

続いて、阿部さん。「マーンには追川さんのようなリーダーがいて、そのこと自体が一番のサポートだと思ひます。僕はリーダーに、家族のことなども聞いてもらっています。世間話感覚で、気軽に聞いてもらえるので助かります。

これからはもっと仕事の幅を広げて、できれば定年まで勤め上げたいです。マーンはいい会社なので、働くのが『怖い』と思ひている人にもリーダーや会社を信頼して応募してもらいたいです」。

マルエツ草加デリカセンターでは、 多くの障がい者が勤務中

マーンではマルエツ店舗での商品補充、清掃などを行う店舗従業員以外にも、マルエツの生鮮加工を行うセンター(川崎市・三郷市)で働く従業員もいます。24年3月に稼働開始したマルエツ草加デリカセンターでは、炊飯BOXやクレート(容器)の洗浄やクリーニング、清掃等の仕事を障がい者が行っています。4~5人程度のメンバーに対して1人のリーダーがつくため、分からないことなどが発生したらすぐに相談可能。とにかく頼れるリーダーがサポートしてくれるのが、マーンの特徴です。

「リーダーは常に、現場でケガなどが発生しないよう見守ったり、『これを先にしましょう』など優先順位をつけるなどアドバイスをしたりと、従業員が働きやすいよう指示や声かけに気を配っています」。

追川さんはそう言います。

「私自身、発達障がいの息子を育てています。家族間では言い方など難しいところもありますが、従業員には自分の子育てを通じて学んだノウハウを活かして接するようにしていますね」。

そう話す追川さんの眼差しは、優しく感じられました。

